

実践研究賞

スクールリーダー・フォーラム事業の持続的実践 —大学と教育委員会合同プロジェクトとして—

大阪教育大学 大脇 康弘

1 実践研究紹介

概要

スクールリーダー・フォーラム（SLF）は、スクールサポート（学校支援）とスクールリーダーの育成を目的とする事業である。フォーラムでは、スクールリーダーが学校づくりの課題に即して自校の実践を持ち寄って研究協議し、学校づくりの理論・政策・実践を総合的に検討することを重視してきた。また、スクールリーダー教育について研究協議し、実践的にスクールリーダー育成の取り組みに挑戦してきた。総じて、スクールリーダーの「学びの場」（フォーラム）を創り出すことをめざしてきた。

このフォーラム事業は「大学と教育委員会の連携協力協定書」（2002年）に基づいて、大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト（SLP）が大阪府教育委員会および大阪市教育委員会（2009年度以降参画）と連携協力して、合同プロジェクトとして取り組んできた。SLPは大阪教育大学の学内横断組織（代表は長尾彰夫現学長、委員長は大脇康弘、メンバーは10人前後）で、学校とスクールリーダーをサポートする多種多様な事業に取り組んできた。これまで開催されたフォーラムの概要をまとめたものが表である。

フォーラムの独自性と有効性

フォーラムの理念は発足時から現在まで一貫しており、次のようにまとめられる。①スクールリーダーの「学びの場」を創る、②学校づくりを専門的立場から支援する、③学校づくりの理論・政策・実践を総合的に検討する、④実践者・政策担当者・研究者が現実に関し研究交流する、⑤大学・学校・教育委員会がコラボレーションする。

フォーラムは1日または半日の大会で、通常土曜日または日曜日に開催されるが、単発の行事というより年間を通じて連携協力の取り組みを重ねる。フォ

表 スクールリーダー・フォーラムの概要

単位は人、報告書のみ頁

回	フォーラムのテーマ	基調講演者	シンポ	分科会	参加者	報告書	開催年月日
1	学校教育自己診断を実践する	木岡一明	3	7	112	105	2003. 3. 1
2	学校を開く・学校を診断する	成山治彦	3	14	156	140	2003.11.29
3	スクールリーダー養成の必要性と可能性	小島弘道	4	—	101	160	2004. 3. 27
4	授業評価の理論・政策・実践	森田・大木	—	6	21	132	2005. 2. 19
5	リーダー層教員の力量形成	木原俊行	4	—	121	116	2005.11.26
6	スクールリーダーの学習拠点づくり	大野・中島	2	5	31	160	2006.11.26
7	学校課題への挑戦	福永光伸	4	21	192	115	2008. 1. 30
8	学校の自己革新と支援体制	大脇康弘	3	15	27	96	2009. 2. 28
9	豊かな学校評価を求めて	天笠 茂	5	8	135	108	2009.11.29
10	スクールリーダーの実践力育成	竹内・佐野	4	(WS)	82	130	2010.11.27
11	次世代スクールリーダーの育成	元兼正浩	4	(WS)	92	108	2011.11.19
12	スクールリーダーの学びの場	寺岡・大脇	4	24	73	126	2012.11.24

フォーラムの準備のために企画会議や意思疎通のための連絡調整はほぼ年間を通して行われる。事例報告校に対しては大学教員や指導主事が学校訪問をし、必要に応じて連絡調整、意見交換、助言指導が複数回行われる。また、フォーラムの報告者は事前に完成論稿を提出しそれを編集した「フォーラム報告書」が大会当日に参加者に配付され、研究協議が行われる。さらに、第10回以降は参加者に事前の学習課題・資料を提示して、テーマに関する問題意識を深めてもらう学習を組み込んでいる。

フォーラムでは学校教職員・教育政策担当者・教育研究者の三者が「同じ土俵」に上がり、学校づくりおよびスクールリーダー教育の理論・政策・実践を総合的かつ多元的に研究協議してきた。特に、複数の事例校から学校づくりの実践を報告してもらい、それをめぐって実践方策だけでなく政策分析や理論的視野から研究協議してきた。これを通して、報告者はもちろん参加者は気づきと発見、刺激と元気を得てきた。フォーラムは関係者が実践の手がかりを得ると共に、その成果を教育研究や教育政策に反映させる「しかけ」を組み込んでいる。これは大学・学校・教育委員会のコラボレーションに支えられてはじめて具体化したのである。

フォーラムを形態別に類型化すると、「公開協議型」「参加者報告協議型」「セミナー展開型」「ラウンドテーブル型」の四種になる。「公開協議型」は基調講演・シンポジウムと分科会を組み合わせるもので、フォーラムの基本型である。その変型として分科会を設けないこともある。「参加者報告協議型」は

参加者のほとんどが順次報告し全員で協議するもので、参加者がじっくり討議し「知識創造」するのにふさわしい形態である。「セミナー展開型」は数回のセミナーを開催し、その取り組みを生かしてフォーラムを開催するものである。「ラウンドテーブル型」は少人数グループに分かれて「語りと傾聴」によって実践や学びを共に探究し、それを全体会で交通整理するものである。このようにフォーラムを類型化できるが、その内実は極めて多様である。企画運営者からみれば、理念は一貫して変わらないが、各回ごとに教育施策の展開、学校現場の実施状況、大学と教育委員会の組織体制などを総合的に判断してテーマ・内容・方法・形態を柔軟に固めてきたというのが実情である。

フォーラムの社会的意義

フォーラムは多様なテーマ・形態で取り組まれてきたが、次のような共通点が見出せる。第一に、フォーラムは三者の「つながる場」として形成されてきた。①教育研究者・学校教職員・政策担当者の連携、②大学・学校・教育委員会の組織間連携。第二に、フォーラムは「創発の場」として形成されてきた。①学校づくりおよびスクールリーダー育成の理論・政策・実践の関係づけ、②理論知と実践知の交流・対話・統一。第三に、フォーラムの理念が確かに具体化され実現されてきた。①独自性・持続性・挑戦性、②学校支援とスクールリーダー育成への貢献。スクールリーダー・フォーラムはスクールリーダーの「学びの場」として創出され、「創発の場」となり、「大阪型フォーラム」として独自の発展を遂げてきたのである。

12回にわたるフォーラムの講演者・報告者は161名で、参加者は延べ1,143名である。フォーラム報告書12冊は総頁数1,496頁で10,000部を超えており、広く配布されている。このフォーラムの企画運営と実施にあたっては大阪教育大学、大阪府教育委員会、大阪市教育局の合同プロジェクトの関係者をはじめ、学校教職員、大学教職員、教育研究者から多大なご協力とご支援をいただいた。日本教育経営学会会員でご報告ご執筆いただいた方も少なくない。それに支えられてフォーラムは11年間絶えざる挑戦を重ねることができたのである。